



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

| | |
|------------|---|
| Title | モダンダンスにおけるフェミニズムとジャポニズムの影響について：1900年のパリ万国博を中心として(fulltext) |
| Author(s) | 秋葉, 尋子 |
| Citation | 東京学芸大学紀要. 芸術・スポーツ科学系, 60: 191-199 |
| Issue Date | 2008-10-31 |
| URL | http://hdl.handle.net/2309/95728 |
| Publisher | 東京学芸大学紀要出版委員会 |
| Rights | |

モダンダンスにおけるフェミニズムとジャポニズムの影響について

—— 1900年のパリ万国博を中心として ——

秋 葉 尋 子*

舞踊

(2008年6月18日受理)

AKIBA, H.: Modern Dance under the influence of feminism and japonisme. Bull. Tokyo Gakugei Univ. Arts and Sports Sciences., 60: 191-199. (2008) ISSN 1880-4349

Abstract

This study is Modern dance under the influence of feminism and japonisme. At the Pari World Exposition (1900), Modern Dance was greatly influenced by japonisme.

As the situation has set up stage by Loie Fuller, Sadayakko and Haruko were getting a tremendous impact on Modern Dance.

Loie Fullar achieved success through great dancer and producer. She heads her theater, The Pari World Exposition (1900). Her rose rapidly in the world.

Loie Fullar, Isadora Duncan and Ruth St.Denis, there Modern Dance ware great success, at the European Continent.Her mothers ware affected by feminism.Her mothers led the family dance company to the European Continent.

Feminism and japonisme were big fad among Modern Dance.

Department of Dance, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 本稿は、モダンダンスにおけるフェミニズムとジャポニズムの影響について論じている。1900年に開催されたパリ万国博を中心として、主としてモダンダンスにおけるジャポニズムの影響について述べている。それ以前に開催された万国博等によって美術や工芸のジャポニズムがブームになり、1900年パリ万国博のピーク時にモダンダンスはジャポニズムの影響を受け、ロイ・フラー等によって日本人の貞奴や花子がクローズアップされる。

モダンダンスの初期において活躍したロイ・フラーをリーダーとして、イサドラ・ダンカン、ルース・セント・デニス等のアメリカ人の女性がヨーロッパで成功を収める。彼女たちの母親は、フェミニズム思想をバックボーンとし、19世紀の男性社会の中、一家を率いて公演活動をし、20世紀初頭には娘達をモダンダンスの初期の担い手として世に送り出した。

当時のフェミニズムとジャポニズムは、モダンダンス初期の活動に重要な影響を与えた。

* 東京学芸大学舞踊分野 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

はじめに

モダンダンスを歴史的に見る場合、パリの万国博覧会との関連が重要となってくる。特に、1900年の開催については、密接なものがある。他の芸術分野についても、パリ万博とジャポニズムとの関連は、特に重要なものがある。モダンダンスは、洋舞であると考えるのが一般的であるが、実際は逆輸入ではなかったのだろうか。例えば、モネの睡蓮が、パリ万博のジャポニズムと関連し、逆輸入され日本人が好む洋画であるということと類似している。モダンダンスが、モネの絵ほどに日本人に人気があるかどうかについては、疑問の余地があるが、バレエよりは、日本人の身体に適していると考えられる。

筆者は、長い間、外国において日本の代表的なものとなると、なぜ富士山と芸者なのかと思っていた。特にフランスにおいて、近年放映された「さゆり」のポスターを観て、白塗りの芸者チャン・ツイイーの顔が全面に出ていることで、やはり日本は芸者であったのかということをも再認識せざるをえなかった。パリ万博以来、そのよしあしを別にして、富士山と芸者は国際的に市民権を得ていることは、疑いのない事実である。当初、映画「さゆり」のオーディションで、ニューヨーク在住のモダンダンサー岡本リカが、その役を射とめ話題となったが、実際は、数年たってチャンに切り替わっていた。チャンも中国のダンサーであったので、どちらもダンス出身者である。日本の芸者は、ダンサーのイメージがあるということでもある。映画にせよ、舞踊にせよ、日本人を演ずるのは、日本人とは限らず、オーディションでは、アジア人の中から選ばれることになる。とすると、日本の芸者は、アジアのダンサーの代表でもあるということになる。パリの万博の影響は末代までもということであろうか。反論することもなく、イメージありきで現代に至っていることになる。

それでは、パリ万博の花形であった芸者「貞奴」は、モダンダンスにどのような影響を与えたのであろうか。そのことを検証する必要がある。ピカソのデッサンに描かれている貞奴の姿は、まるで水が流れているような、流動的でダイナミックな動きのあるものである。さらに、もう一人の芸者「花子」は、ロダンの彫刻として有名である。彼女の頭部は、いろいろな形でロダンの家のロダン美術館に展示されている。その数は半端な数ではなく多数である。ロダンと花子の話は、花子がなくなってから、日本では一般的には知られるようになったが、世界的には知る人ぞ知る事実であった。筆者は、テレビ報道で知った。それは、ダンスの世界からではなく、ロダンの彫刻のモデルになった日本女性として、報道されたも

のである。その後、パリのロダン館で、2つの花子の頭部を観ることになる。それでも、ダンスとのかかわりについて、深く知ろうという意欲は出てこなかった。

モダンダンスの歴史について、人に伝える立場になって、一般的なことしか言っていない自身に気がついたときに、花子を置き去りにしてきたことに気がついたのである。貞奴のことについては、舞踊の国際会議で研究発表し、研究誌で論文を発表する外国人がいるということに、興味深いものを感じた。それほど貞奴は、インターナショナルな名士である。モダンダンスのジャポニズムということが考えられるとすれば、1900年の万博以前にブームを巻き起こした葛飾北斎をはじめとする浮世絵や数々の陶芸や塗りもの等のジャポニズムのブームより少し後に、起こったことになる。

その理由としては、大きく二つのことが考えられる。ひとつは、浮世絵等で紹介された、日本の美人画に画かれている芸者が、実際に目の前に現れ、動いているという驚きあげられる。浮世絵を眺めているときには、日本に行かずして実物に会えるなどとは、考えもしなかったに違いない。もうひとつの理由は、1900年パリ万博の目抜き通りにある劇場のプロデューサーであり、ダンサーでもあったロイ・フラワーという、有能な女性の存在であったといえる。彼女は、万博会場に自らのブースを持ち、貞奴に活躍の場を持たせ、ダンスのジャポニズムを実現させ、日本の女性の地位を高めた。さらに、2年後に、花子についても、プロデュースをし、座長として公演させるのである。この稀有なる優れた人物により、日本女性は一気に男性を凌駕し、全ヨーロッパの人気を博し、世界のスターとして飛翔するのである。

1. パリ万国博とジャポニズム

1858(安政5)年に日仏修好通商条約が締結されて以来、2008年は150周年になる。日仏にとって、記念すべき年にあたって、芸術都市パリの100年展が東京都美術館で開催された。国際的な広がりや若い芸術家を集めた1830年から1930年にいたる100年間に焦点をあてている。この時代のパリは、世界で最も栄光ある絶頂期を築いた。その中でも、パリの万国博覧会は注目に値する。

1855年から1900年までに、パリは5回の万国博を開催している。1851年のロンドンで世界初の万国博覧会が開催され、それに呼応してナポレオン3世が1855年にフランスで最初の万博を開催した。2万4千もの出品者が世界の産業の最新の成果を展示、中でも最初のミシン「シンガー」が話題を呼んだとカルナバレ美術館館長が述べている²⁾。ダンスと何も関係ないようであるが、このミ

シンのシンガーは、イサドラ・ダンカンのスポンサーとなるので、モダンダンスの誕生をバックアップする土壌が生まれたときでもありと考えられる。

渡辺純子編による関連年表³⁾によると、1855年は、初めてのパリ万博のみでなく、ショシャールがパリにルーブル百貨店を開いたということ、日本の洋学所が設立され、日本における西洋画受容の拠点となるということなどを記述している。ショシャールは、多くの絵画を収集し、ルーブル美術館に寄付したことで有名な人物で、パリ万博の時代になくはならないパトロンである。パリ万博時代には、デパートも多くでき、経済的にも発展していたことがうなずける。中国や日本の美術品や工芸品が、収集家によって購買され、そのことは本国から離散していくことを意味することでもあった。

1862年には、元英駐日総領事オールコックが、日本で収集した美術工芸品をロンドン万国博に出品した。日本政府が初めて正式にパリ万国博に参加したのは1867年で、パリでの2回目の開催の時であったので、すでにその前から、外国人によって出品され、日本から離散していたことになる。ジャポニズムの呼称が生まれるのは、1872年であり、ウイーン万国博覧会で、日本の古美術が紹介された時である。1878年には、3回目のパリ万国博覧会が開催され、多数の日本工芸品が出品され、ジャポニズム熱が高まる。

浮世絵に関しては、1858年の日仏修好条約締結の翌年の1859年に、版画家ブラックモンがこのころに「北斎漫画」と出会っている。1887年には、ゴッホが浮世絵を模写している。1889年は4回目のパリ万博であったが、フランス革命100周年であり、エッフェル塔が完成したときでもある。日本では、東京美術学校が開校し、大日本帝国憲法が公布されている。その翌年1891年に、フランスではエドモン・ド・ゴンクールによって、「歌麿」が刊行されている。1900年には、5回目のパリ万博が開催され、史上最も華やかな万博とされ、ロイ・フラーの活躍により、モダンダンスの萌芽期にとっても記念すべき年であった。その翌年の1901年には、ウイーンで大規模な「北斎展」が開催される。

ジャポニズムは突然生まれたのではなく、日本の浮世絵を中心とする美術品や工芸品が脚光を浴びる以前に、万博では、はじめてのロンドン開催で、中国がすでに出品しているので、オリエンタリズムのバックボーンの上でのことであったともいえる。爆発的なジャポニズムのブームは、パリ万博のみでなく、ロンドンやウイーンの万博やその前後にも、特筆すべきことがあった。パリは特に、芸術都市であり、1900年には、人工的にもピークを迎え、エッフェル塔が完成し、電気で街が輝き、若き

芸術家が集まり、多くの芸術が生まれたといえる。

オリエンタルでは、江戸と北京が目ざされ、特に江戸に欧米の関心がよせられ、浮世絵の価値は、万博で爆発的にブームになっただけでなく、地道な書物の翻訳や紹介によって、世界の人々の関心を惹いた。このような、文化的で芸術的な背景によって、1900年のパリ万博でのロイ・フラーによる貞奴の紹介が、外国の人々の驚嘆するところとなるのである。

2. モダンダンスにおけるジャポニズムの影響と貞奴

1900年のパリ万国博で、ロイ・フラーの劇場で活躍した貞奴について、把握する必要がある。貞奴は、女優の第1号とされているが、モダンダンスのバイオニア達との活躍をともにしていることから、日本のモダンダンスの草分けと考えてもよいのではなかろうか。まずは、1894年(明治27年)川上音二郎と結婚し、1899年(明治32年)川上一座とともに渡米し、サンフランシスコで日本の女優第1号の川上貞奴としてはじめて舞台にたつところから、海外公演のはじまりとなる。

シカゴではエキゾチックな日本舞踊と貞奴の美貌が評判を呼び、人気を得た。当時、小村寿太郎を日本国公使とする日本公使館の夜会で上演され、マダム貞奴は東洋の神秘の権化のようだと新聞で讃えられた。日本の演劇が初めてということもあり、夜会にはマッキンレー大統領や閣僚らが参加し、日本公使館はじまって以来の大人数が集まった。川上一座は「曾我兄弟」等を演じ大喝采を受け、日本の豪華な着物を着た貞奴の美しさにアメリカの婦人たちは感嘆した。

1900年、アメリカで評判になった川上一座はイギリスに向かった。イギリスでも高い評価を受けた川上一座は、イギリス王室から招待を受け、バッキンガム宮殿で芝居をすることになった。貞奴は、皇太子エドワード(後のイギリス国王・エドワード7世)の前で、日本舞踊「道成寺」を演じた。シカゴ以降は、インターネットの2008年3月の世界に誇る日本の話、世界を魅了した初の日本人女優貞奴、に記されている。

同年(1900年)にパリの万国博で「マダム貞奴」として世界的に有名になる。ロイ・フラーの劇場は、万博会場の目抜き通りにあり、「芸者と武士」という恋や決闘など歌舞伎と組み合わせて作った創作芝居を演じた。貞奴が元芸者ということから、浮世絵等の美術の富士山と舞台の芸者が日本を代表する言葉「フジヤマ」「ゲイシャ」となり、現在もお善きにつけ悪しきにつけ後世に影響を与えている。貞奴の名は、背水の陣で渡米した米を始め、仏、英、ロシアと活発な公演活動を経て、パリ万

博を経て世界的となる。貞奴の人気は、音二郎よりも上に立っていたと言われている。その2年後に再渡欧したときには、世界的に名声を博したイタリアの女優であるドーゼと同等に東洋のドーゼとまで言われた。また、フランス政府からはオフィシェ・ダ・アカデミー勲章が贈られた。

1900年のパリ万博の公演は大好評で、「フィガロ」紙によれば、1819年のパリ万博はエッフェル塔が一番注目されたが、1900年のパリ万博は、絶妙な貞奴の芸が一番であると激賞されたほどである。フランスのルーベール大統領は博覧会へ出場した各国の俳優をエリーゼ宮へ招待し、川上一座も招かれ、満場を魅了し、この園遊会で、大統領は貞奴の手をとって園内を歩いたといわれている。この時、貞奴が着ていた着物の美しさが評判を得て、「キモノドレス」がパリの貴婦人の流行のファッションとなった。ドレスのみでなく香水「ヤッコ」も発売となり、演劇雑誌「ル・テートル」では、表紙を飾るほどの人気となった。これまでの人気となるには、単に外見の華麗さのみでなく、しぐさや立ち居振る舞い、おもてなしの心など、芸者に備わった優雅な身のこなし等が、評価されたといっても過言ではない。

ロダンが彫刻で有名であるということを知らなかったことと、忙しいということでモデルの依頼を断ったが、貞奴はピカソのデッサンやモネの絵画に描かれているということで特筆すべきことがある。日本の箱根のポーラ美術館で、モネのモデルとなった貞奴の道成寺風の絵があったが、その着物姿のあでやかで豪華な美しさは、全ヨーロッパを中心とする世界の人々を魅了したことを物語っている。ジャポニズムの影響を多く受けたモネが、オーベルニーの土地に睡蓮の池のある家を作り、浮世絵の手法を取り入れた睡蓮等の日本人が好きな絵画を描き、今も尚、逆輸入され、日本人に感動を与えていることは、日仏の文化交流をより一層深めることになったのではないかと感謝している。その他の美術家のクリムト、モロー、クレーらも貞奴の舞台に魅了され、貞奴がパリの関心の的であったということ物語っている。「蝶々夫人」のイタリアの作曲家ジャニは、貞奴を観るためにミラノに行き、ヒロイン像の参考にしたことは、貞奴が芸術界全般に大きな影響を与えていたということが理解できる。

3. 1900年のパリ万国博とオリンピックの女性参加

クーベルタン の提唱によるオリンピックが、パリ万国博の副産物であったということについては、一般的にあまり知られていない。運動の博覧会としてのオリンピッ

クの賞もパリ万博に習って、1等賞、2等賞、3等賞となった。女性のオリンピック参加にとっても、1900年のオリンピックは、大変重要である。パリ万博のおかげで、女性のオリンピック参加が決定したといっても過言ではない。クーベルタンは女性の参加については、否定的であった。オリンピック委員会が、パリ万博全体の委員会の決定に従わなければならないようになってから、女性のオリンピック参加が決まるのである。しかも、クーベルタンのクラブのテニスの女性が、オリンピックで活躍することになり、彼の立場は危ういものがあった。

近代日本女性体育史—女性体育のパイオニア達—の年表⁵⁾には、パリの万博については、1878年5月1日、パリ万国博覧会に参加とのみ記述があり、ジャポニズムのブームがはじまる頃であり、日本が初めて出展した時のみ書かれている。女性のオリンピック参加に関して重要な意味を持つ、1900年のパリ万博について記述はなく、その重要性についても年表には記録されていない。1900年のパリ万博に関係深いロイ・フラー、イサドラ・ダンカン、貞奴の記述も特になく、再販して加える必要があることを確認した。年表のみを見ると1900年の日本の動きについては、4月に「明星」が創刊されている。翌年4月20日には、日本女子大学が創立され、同9月25日には、日本遊戯調査会「遊戯雑誌」が創刊されている。女子教育、女子体育、遊戯、ダンスに関する時代の到来を示す重要な出来事があった。

日本女子大学の開校の年に第1回の運動会が開催されている。創立者のひとりである成瀬仁蔵によれば、1. 競争的遊戯 例え、バスケットボール等 2. 表情的体操 例え、デルサート式、白井式等 3. 技術的運動 例え、自転車等を行い、体育の目的は真・善・美にあり、「善学善遊」を掲げていた。ダンス関係となると2. 表情的体操ということになる。運動会の写真にあるスカーフ体操は、動きのダイナミックさとソロと群舞の違いはあるが、ロイ・フラーのスカーフダンスを思い浮かべるようなムードである。ロイ・フラーのダンスは、映像で観る機会があった。パリの映画博物館が近年出来、映画が始まった当時のままのカードを回しながら見る映像を体験することができた。映画の始まりとロイ・フラーのかかわりがいかに重要であったかが理解できた。スカーフダンスはこの時代の世界的流行であり、ロイ・フラーだけのものではなかったのだが、映像の影響によることもあって、まるでロイ・フラーとスカーフダンスは切っても切り離せないほど密接な感じがする。成瀬は、アメリカに留学していたから、ロイ・フラーの映画を見る等の接点がどこかにあっても不思議ではない。

実際に女子体育の実践をしたのは、日本女子大学の開

校した年に体操教授となった白井規矩郎(しらい・きくお)であり「新式女子表情体操」の創作発表をした。それは、デルサートの流れの体操で、容儀訓練と表情訓練の二部に区分され、韻文や唱歌の内容を体で表現するもので、流動韻律的であり、女子の姿態、容儀を整え優雅な精神を涵養するのに適していたと佐藤友久の「日本体操実技史」の中で評価されている。

1900年のパリ万国博の頃は、まさしく、女性体育・スポーツの普遍化へのスタートであったといえる。オリンピックの女性種目で1等賞をとったテニスについては、女性が活発にやることによって、他の種目よりも普及した。体操については、律動体操や表情体操が女性の運動普及によって、従来の機械的な体操からの脱皮を図ることができた。ダンスについては、バレエを凌駕するモダンダンスの誕生する瞬間でもあった。

これらの現象が、複合して、世界の女性・スポーツ・ダンスの発展に、1900年のパリ万国博は、多大な貢献をしたといえるであろう。日本の女性教育のスタートラインであったというタイミングの中で、女性体育が重要視され、展開されていくきっかけともなっている。もちろん、国策とのかかわりもみのがせない事実である。与謝野晶子の「明星」が、1900年に創刊されていることから、推察されることである。

女性体育・スポーツの指導者が、欧米に留学して、これらのことを吸収し、女性体育・スポーツの指導者養成の専門学校を創立し、現在の女性体育・スポーツの東京女子体育大学となるスタートをきったときでもあった。

4. モダンダンスにおけるフェミニズムの影響について

ロイ・フラー、イサドラ・ダンカン、ルース・セント・デニスは、いずれも1900年頃ヨーロッパで名をあげたアメリカ人のダンサーであった。その背景には、アメリカのショーダンスで活躍している母親の存在が大きかった。フェミニズム運動も盛んであり、精神的な高揚もある時代であった。彼女たちは、家族のリーダーでもあり、たくましく強い母達であった。単にアメリカでのショーに満足せず、ヨーロッパに行って自分の考えを表現できるモダンダンスの誕生や育成に重要な活動をしている。

それでは、その頃のアメリカのフェミニズムとは、どのようなものであったのだろうか。2007年のジェンダー史学第3号の兼子歩の論文「黒人レイピスト神話」のポリテクスー20世紀転換期アメリカにおける人種暴力・ジェンダー・階級¹⁾の中に、諸種の紹介がなされている。ティルマン(1907年)によれば、ゲルマン人はその女たちの美德を何よりも愛し、ゲルマン人、サクソン人、

イングランド人は同じ偉大な起源から発したひとつの民であるとし、我々の言語のうち最も高貴で神聖な三つの単語、女・妻・母は、全てサクソン起源であると述べている。

ホード(1997年)やソマービレ(2004年)によると、奴隷が解放され、「財産」から自由市民になると状況は変化し、19世紀末までには奴隷／自由の区分や階級ではなく人種がなにより重視されることになったと述べられている。白人のバレエ団や黒人のみのバレエ団があるというのもうなずける。モダンダンスが、人種を超えてその存在を認められ始めるきっかけでもある。しかし、人種の偏見がなくなるまでには、多くの弊害をのりこえなければならなかった。

ジェルクス(1907年)は、[黒人] 説教師には手が出せないが、[黒人] 学校に気をつけることはできると主張し、教員免状の授与や学校への採用の権限を利用することによって白人が黒人教師・学校への統制を強めて、黒人コミュニティを規律すべきだと露骨な言葉で訴えた。1903年、コルクハウンも、学校、教会、そして社会生活のあらゆる制度と組織は白人の手に多く握られ続けるべきであると述べたりして、白人が外部から圧力をかけることができても内部から自由に支配・監視できない黒人の自律的制度や組織を警戒する議論が多く産みだされていた。

単純に「白人」対「黒人」の枠組みではなく、より複雑な分節化・不可視化を伴う言説実践である。この点を最も明らかにしてくれるのが、性差に基づいた社会編成と権力関係を構成する概念としてのジェンダーとセクシュアリティである。白人女性に対して、黒人レイピストからの保護ということは、白人至上主義的な家父長主義の隊列内に彼女らを留める圧力として機能した。黒人レイピスト神話を振り回すことでようやく維持される20世紀転換期の白人至上主義体制とは歴史的には一枚板でも盤石なものではなかったと考えられると、兼子は、ジェンダー史学の中で述べている。

このような時代背景の中で、イサドラ・ダンカン、ルース・セント・デニス等のアメリカ人ダンサーは、強い意志を持ち、フェミニズム運動に関係した母親に育てられ、母親に率いられた一家と共に、アメリカやヨーロッパをまわるのである。19世紀の男性社会の中で、強い母親による女系家族から、モダンダンスが生まれたのである。ルースの母エンマは1870年、男女共学が開始されるミシガン大学の薬学科に入学し、フェミニズム運動に目覚めた。セント・デニスがヨーロッパに渡ったのは1906年であった。彼女の東洋的なダンスは、ロンドン、パリ、ベルリンなどで人気を集めた。ダンカンと同じく、アメ

リカでよりも、まずヨーロッパでの評価を得たのである。ヨーロッパにとどまりアメリカにもどらなかったダンカンと異なるところは、セント・デニスとはヨーロッパにとどまらず、アメリカにもどり、アメリカをまわって成功したところである。

1900年のパリ万国博でロイ・フラーのように出演し、イサドラ・ダンカンのように観たりしてはいなかったが、ヨーロッパでの活躍は、モダンダンスのパイオニアの重要な人物として、歴史に刻まれることになる。ロイ・フラーやイサドラ・ダンカンと貞奴のかかわりとは異なり、セント・デニスは、ロスアンゼルスで元芸者の日本女性から踊りを習い、彼女のダンス・グループには、インド人をはじめとする多くの東洋人が参加し、その中に日本人もいた。

5. ロイ・フラーの存在に関する重要性について

モダンダンスの歴史を紐解く場合、ロイ・フラーの存在をどうとらえるのかについて議論されることがある。モダンダンスの歴史にはっきりとした意味を語るべきであるかいなかについて、まず、記述する必要があるからである。ロイ・フラーのダンスは、時代的に注目されたという事実はあるが、舞踊を体系的にみて、はたして、どのように位置づけたら適切であろうか。しかし、どのように考えても、ロイ・フラーをはずしてモダンダンスを考えるとするのは、難しい。特に、歴史的に見た場合、見逃せない事実が存在するのである。

1900年のパリ万国博におけるロイ・フラーの実力は、あらゆる記述に登場するといっても過言ではないほどの活躍をしている。万博会場にロイのブースが設けられ、ダンスが演じられていた。その会場に、日本の川上音二郎一座が招かれ、貞奴の演技が世界的に有名になったということが、ダンスのジャポニズムの到来ともいえる現象を生み出すことになる。ロイ・フラーは、ダンサーとしての才能だけでなく、プロデューサーとしての実力も備えていたのである。日本の女性が世界で活躍する契機が、ロイ・フラーによって与えられたといえるであろう。

さらに、ロイ・フラーの影響は、貞奴のみならず、パリ万国博の2年後にヨーロッパにやってくる花子にも大きなインパクトを与えるのである。花子は、1900年のパリ万国博こそ逃したが、後の万国博でロイ・フラーに見出され、貞奴以上の影響を世界の各界に与えたのである。特に、ロダンとの関係は、他の日本人の誰よりも深いものがあつた。ダンスのジャポニズムは、花子に至って最高潮に達したといっても過言ではない。浮世絵に描かれた日本の女性が、世界の人々の眼前に実物としてあらわれ、演技

までしてくれるとは、驚嘆する以外の何物でもなかったに違いない。

このように、ロイ・フラーのプロデューサーとしての実力によって、ダンスのジャポニズム現象が起こつたのである。これは、すでにそのベースに1967年のパリ万国博に出展していた日本の文物、特に葛飾北斎等の浮世絵等のインパクトが大きかった。1900年の万国博では、すでにジャポニズムの流行は下火になっていたが、ダンスのジャポニズムは、ピークに達していた。モダンダンスにとって、女性と日本は、イメージに合っていたのではないかと思われる。バレエといえば、西洋が中心であり、特にヨーロッパであったということを考えれば、アメリカ人のプロデューサーと日本人のダンサーという組み合わせは、ダンスの動きの種類はともあれ、モダンダンスの先駆けになりうる状況は存在したといえる。

19世紀末から20世紀初期にかけては、女性の活躍は世界的なものであつたといえるので、日本女性もその波に乗ることができたのである。これもひとえに、ロイ・フラーなる女性の存在が大きかった。貞奴に関して、川上音二郎一座のスターとは言え、彼の妻としての立場もあり、音二郎を前面に出していたのではないかと思われる。そこで音二郎が、女優として活躍することは、西洋では認められているので、貞奴もやってみたらと提案したところ、そのプランが実現し爆発的にヒットした。このことは、単に理解ある夫である音二郎の力だけでなく、ロイ・フラーの企画が優れていたということでもある。先見の明があるということは、時代の先駆者ともいえ、ダンスの世界のみならず、世界の動向を見る上でも、ロイ・フラーの存在は重要なものがある。

貞奴以上に花子に関しては、ヨーロッパに来ていた日本の演技者のトップとして花子を置き、座長とするあたりは、川上音二郎にはできなかったことである。女性の社会的な地位の大切さを、ロイ・フラーはだれよりも知っていたに違いない。ダンスのジャポニズム自体が生み出す、女性の活躍の場の重要性を認識し、時代を創り出したプロデューサーとしての才能は、日本女性にとって、その実力は尊敬に値し、感謝すべき行為であつた。今こそ、ジェンダーというジャンルで研究が推進されているが、1900年前後の女性のエネルギーは、筆舌に尽くしがたいものがあつたに違いない。女性研究者としても、舞踊家としても、また日本に生きる女性としても、筆者にとって、ロイ・フラーについてもっと深く何らかの著述を残しておきたい衝動にかられた。モダンダンスの始まりが、女性の為のものであつたかどうかについて議論されることは、今後の筆者の研究にとって必要不可欠なものであることを確認することができた。

6. ロイ・フラーとイサドラ・ダンカン

モダンダンスのパイオニアの一人であるイサドラ・ダンカンがどのようにロイ・フラーと接点があったのかについて論じることは、モダンダンス史にとって重要なことである。イサドラは、ロイ・フラーの一座に参加し、ウィーンやブタペストに公演旅行をし、やがて、フラーから独立して、ミュンヘンやベルリンで踊った。貞奴が活躍する1900年のパリ万国博では、彼女らの活躍を観る立場であったが、それ以後は、一緒に活動することになる。イサドラとロイは、共にアメリカ人であり、女性である。日本人の演技者と一緒にヨーロッパの各地を巡業したことは、モダンダンスが、東洋的な色彩を帯びていることから、ダンスのジャポニズムの影響が織りなす、独特のダンスの世界を生み出す源泉となったと考えられる。

イサドラとロイの共通項は、彼女らの母親の活躍のバックボーンあればこそ、アメリカでの基盤とヨーロッパでの発展があったということである。ロイは、アメリカのレビューの世界からダンサーとしてデビュー後ヨーロッパを目指し、母とともにハンブルグ、ケルンのショーに出演する。そして、パリのミュージック・ホール出演で、一挙にスターとなる。一方、イサドラは、ロイ・フラーの一座に参加し、ウィーンやブタペストに公演旅行をし、やがて、フラーから独立して、ミュンヘンやベルリンで踊った。この間、母はずっと一緒だったようである。イサドラのヨーロッパでの活躍のきっかけとなる兄のレイモンドは、途中でアメリカに帰った。しかし、1903年にはベルリンに一家が再び集まる。

1990年頃のイサドラについては、海野弘の著書「モダンダンスの歴史」⁴⁾ (49ページ) では、次のように述べられている。“イギリスにおけるダンカン一家は、社交界のサロンなどでリサイタルを行い、ある程度の成功を収めていた。しかし、理想主義的なレイモンドはサロニックな芸術に満足できず、新しい方向を求めてパリに向かった。ちょうど、1900年のパリ万国博が開かれようとしていたパリの雰囲気は彼を興奮させ、イサドラと母にすぐにパリにくるようにすすめた。1900年の夏の終わりに、イサドラ達もパリに渡った。万国博ではじめてロダンを見て、大きな衝撃を受けたという。会場につくられていたロイ・フラー劇場で、ロイ・フラーや貞奴の踊りを見ることもできた。”

ヨーロッパにおいては、イサドラは、ロイよりも後輩にあたる。イサドラが見た1900年パリ万国博でのロイ・フラー劇場は、アンリ・ソーバージュの設計で、アール・ヌーボー・スタイルであった。ロイはここで自ら踊っただけでなく、川上音二郎一座とともにマダム貞奴を招

待ただけでなく、出演させて、日本の芝居と踊りを見せた。ロイは、リーダー的存在であり、イサドラと貞奴や花子を結びつけた人物であり、1900年前後のモダンダンスの尖峰となった人物であった。イサドラと貞奴、花子の3人をトライアングルの3つの点であるとする、その中心のさらなる頂点に君臨していたのがロイ・フラーということになる。ピラミッドの頂点のロイとその底辺の3人のダンサーの結束により、スカーフが広がっていくように発展し、影響力が驚異的になり世界的になったことが考えられる。モダンダンスのグローバリズムを実際に展開したエネルギーな女性たちの活躍であった。もちろん、ロイとイサドラの母親の活躍のバックボーンあればこそのおかげでもあることを再確認する必要がある。立体的なピラミッドの形成には、フェミニズムもジャポニズムも重要なことであったのである。

ロイとイサドラの共通項には、晩年の彼女たちのダンス・スクールにも注目したい。上記の海野の著によれば、1919年頃、ロイ・フラー、イサドラ・ダンカン、ジャンヌ・ロンセーによる3つのダンス・スクールが、モダンダンスの学校として目立っていたと述べられている。彼女たちの中で、現在までも伝承されているダンスは、イサドラ・ダンカンのものであろう。ダンカン・スクールから始まり、世界中にダンカン支部を持ち、いまだに若いダンサーたちによってダンカン・ダンスが踊られていることを考えれば、後継という点で3人の中では秀でていえる。ロイ・フラーのダンスについては、現在、若い人々が踊っているかといえば、残念なことに普遍的なものにはなっていないのではないだろうか。ジャンヌにいたっては、今回取り上げることはせず、ロイとイサドラの記述のみにとどめたい。ジャンヌのダンスについては、今後の研究課題としたいと思う。ロイとイサドラの関係は、それぞれの生きた道を論じがちなモダンダンスの歴史にとって着目すべき重要なことであった。

おわりに

モダンダンス初期におけるフェミニズムとジャポニズムについて論じることは、避けては通れないことである。なぜならば、ロイ・フラーをプロデューサーとし、貞奴、イサドラ・ダンカン、少し時をおいて花子をダンサーとしたダンスカンパニーが、1900年のパリ万国博を中心にして、全ヨーロッパに活動を展開する。その背景には、アメリカのフェミニズムやパリの万国博を軸としたジャポニズムの影響が重要な要素であったということが言える。

優秀なプロデューサーであり一世を風靡したダンサー

としてのロイ・フラーをはじめとして、一緒に活動した貞奴、イサドラ・ダンカン、花子と続き、さらに、一緒に活動してはいなかったが、ルース・セント・デニスを加えると、モダンダンスの初期における動きが見えてくる。

フェミニズムの動きとしては、アメリカ人のダンサーであり、ヨーロッパで有名になった、あるいはすでにアメリカで活動し、ヨーロッパでも有名であったモダンダンスの歴史に名を残している人物の母達は一家を率いてヨーロッパで成功をし、ダンサーとして有能な娘達を世界に送り出し、旧態依然とした19世紀の男性社会に厳然と女性の時代の突破口を開いていくのである。その歩みにおいて、19世紀末から20世紀初頭にかけて、展開されたフェミニズム運動が重要な背景となっている。主として、欧米において吹き荒れるが、先進的な女性の在り方ともいえるダンサーという職業の確立に貢献することになる。

ジャポニズムにおいては、諸種の事情があるとはいえ、日本から当時としては遠いアメリカやヨーロッパに出かけ、フェミニズムを背景とするロイ・フラーの強力なるリーダーシップを得て、貞奴や花子という日本女性の世界的有名人を生み出すことになる。この二人に関しては、バックがフェミニズムなのかジャポニズムなのか明確ではないが、両方関係があるとすれば、特にジャポニズムのバックボーンが、他のアメリカ人よりも強いことは、1900年のパリの万博を軸として活動が大きく展開していくことから、推察することが可能であろう。

1900年以前のパリ万国博以前において、江戸の文化が紹介されていなければ、ロイ・フラーがどんなに頑張ってくれたとしても、貞奴ブームを巻き起こすまでには至ってなかったかもしれない。パリにおいて「ヤッコドレス」なるファッションを生み出し、ピカソをはじめとした多くの芸術家に絶賛され、1900年の万国博というパリのピークを飾った美しく身のこなしのよい日本女性の代表が貞奴であったともいえよう。

貞奴や花子については、芸者時代に厳しい訓練をして身につけた舞踊なくしては、パリでの成功はなかったかもしれない。江戸の文化が、芸術の都パリで開花し、明治の時代になって消えゆく宿命にあった文化が、遠い外国で再び大きく花開くチャンスを得たことは、日本文化を長い目で見た時に、感謝すべきことなのかもしれない。江戸期の文化遺産が万国博等で世界中に離散してしまったことを嘆くか、離散してしまったことにより、世界大戦の災禍の中で、2度と見ることや聞くことができなくなるか、どちらがよいかということになると、世界中のどこかに行けば保存状態のよい現物が見られるほうが良

いとも考えられる。

アメリカからヨーロッパに新天地を求めて、ロイ・フラーの先進的な力を得て成功を納めたイサドラ・ダンカンと若干後からヨーロッパにやってくるルース・セント・デニスの違いは、事故でなくなるまで、イサドラはアメリカに帰ることなくヨーロッパに腰を落ち着けモダンダンスのスクールをやり、一方、セント・デニスは、ヨーロッパで成功したあと、アメリカに帰りモダンダンススクールや公演活動をしたということである。ほぼ同じ力の持ち主でも、母国に帰国し活動することで、モダンダンスのメジャーな後継者を生み出すことができたということになる。

同様なことが、ロイ・フラーのリーダーシップにより、ヨーロッパでの成功を得ることができた、貞奴と花子にもいえる。ロダンのモデルとしてヨーロッパに腰を落ち着け、長い間ヨーロッパに滞在した花子はイサドラ・ダンカンに類似している。なぜかということの花子はたとえ日本に帰国しても一切の活動をしなかった。つまり、活動しないということは、花子の活動の死を意味する。ヨーロッパでの成功後に日本に帰国し、女優の学校をつくり、後継者養成をする貞奴の活動は、セント・デニスに類似するところがある。

その差は何かと考えたとき、海外に公演しにいく前に母国での活動がなされてから、ヨーロッパで認められた場合、帰国してからも活動が再開しやすいということがある。では、なぜ、母国の成功だけでは満足しなかったのかということであるが、ヨーロッパのインテリジェンスが必要であったのではなかろうか。モダンダンスが知的なイメージがするのは、アメリカでは、ダンスがショー的であり、人間の内面や思想を表現するということがしにくいということが言えるのではなかろうか。

それでは、日本の貞奴と花子はどうなのかというと、日本では元芸者というイメージが付きまとい、インテリジェンスを感じるようなモダンダンスなるものに取り組みにくかったのではなかろうか。女優には、動きが必要ではあるが、デルサルト式を取り入れたモダンダンス的な動きは、女子大学等の学校の体育の中でインテリジェンスを発揮することになるのである。インテリジェンスによってジャポニズムの影響がフェミニズムの影響に転換した時代であったともいえよう。

引用・参考文献

- 1) 兼子 歩：(「黒人レイピスト神話」のポリテクスー 20世紀転換期アメリカにおける人種暴力・ジェンダー・階級—)、ジェンダー史学、第3号、pp.10, pp.14, 15, 2007年。

- 2) ジャン＝マルク・レリ：(パリ 都市の変貌 1830-1930), pp.106), 東京都 (新書館), 1999年
日仏交流150周年記念, 芸術都市パリの100年展, pp.22, pp.23, 2008年.
- 3) 渡辺純子編：(関連年表), 同上, pp.205～pp.211, 2008年.
- 4) 海野 弘：モダンダンスの歴史, 初版, (pp.47, pp.49, pp.90,
- 5) 加藤節子：近代日本女性体育史—女性体育のパイオニア達一, 初版, (近代日本女性体育史年表), 東京都 (日本体育社), 1981年